

里山における問題について

里山の特性

里山とは、都市域と原生的自然との中間に位置し、様々な人間の働きかけを通じて環境が形成されてきた地域であり、集落をとりまくコナラ、ミズナラ、アカマツ等の二次林を主体とする森林と、それらと一体となった農耕地、ため池、草地等で構成される地域概念である。

里山は、カタクリ、ギフチョウ、ノウサギ等の希少種を含む多様な動植物の生息・生育空間として、生物多様性保全上重要な地域でもある。さらに近年、居住地周辺の身近な自然とのふれあいの場、心やすらぐアメニティ空間、自然観察や環境教育のフィールド等としての価値が高まっている。

同じ里山でも、場所により自然環境や社会的状況が大きく異なり、それぞれの立地や地域住民の生活・生産活動との関係によって多様な価値を有する多義的空間であることから、その特性に応じた保全等の対応が必要となる。

里山が抱える問題の構造

【前提となる社会状況の変化】

- ・昭和30年代以降、生活や農業の近代化に伴い、里山の経済的利用価値（燃料としての薪炭材、堆肥用としての落ち葉や下草、農林産物としてのタケノコ等、牧草用・屋根葺用としての草地 等）が低下した。
- ・高度経済成長期以降、農山村では、農林業の低迷、過疎化等により里山管理の担い手が不足し、昭和50年代頃から耕作放棄地が増加。一方、都市近郊では、都市的土地利用への転換が進行。近年になって経済成長の伸びは鈍化し安定に向かっており、全体としては土地利用転換も減少の傾向にある。



【里山における主な問題】

開発事業（土地利用の転換） 里山の消失 <特に都市近郊>

- ・宅地開発、道路整備（近年も土地利用転換量は大きく増減することなく継続）
- ・ゴルフ場（バブル期に急激に増加し、ここ数年の新設件数は激減）
- ・ゴミ処分場（近年の新設件数は増加傾向）

二次林の放置・手入れ不足 里山の質の低下等

- ・二次林の放置や手入れ不足により、ササ、竹、ツル植物等が侵入・繁茂した場合、林床が暗くなり、カタクリ等の林床植物が消え、コナラ等の更新も自然林への遷移も進まず動植物相が単純化する。シイ・カシ林等の自然林への遷移が進んだ場合には、二次林特有の生物の多様性が低下する場合がある。

ゴミの投棄 里山の環境悪化

- ・目が行き届かない里山へのゴミ・産業廃棄物等の不法投棄（近年増加傾向）